

K450.5-2a

その面を擦つて汚れを落す仕方である。布に深くしみ込んだ汚れを落す効力は比較的乏しいが絹織物毛織物その他厚地のもの、地折れの生じ易いもの、湿摩擦に餘り丈夫でない染色物などの洗濯に適用する。

Approved by Ministry of Education  
(Date Jul. 1, 1946)

昭和二十一年七月一日 印刷  
昭和二十一年七月四日 發行  
昭和二十一年七月五日 總發行  
昭和二十一年八月八日 印刷  
(昭和二十一年七月五日 文部省検査済)

師範被服本科用  
定價金壹圓拾五錢

著作権所有 著者 文部省  
東京都神田區錦町一丁目十六番地  
翻刻發行者 師範學校教科書株式會社  
代表者 森下松樹  
東京都京橋區人形町一丁目十一番地  
印刷者 電新堂  
代表者 新井修平  
東京都神田區錦町一丁目十六番地  
發行所 師範學校教科書株式會社

重  
復

# 師範被服

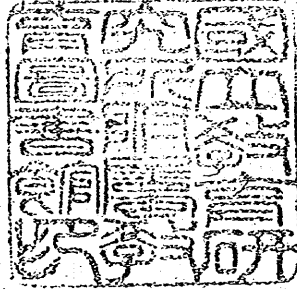
## 本科用

(第三級)

# 文部省

文部省  
圖書  
普及

K450.5  
2a



## 第五節 洗濯と脱水乾燥

## 1. 洗濯

洗濯液で洗つたものは、布に浸込んである洗濯劑及び布から離脱した汚染を十分濯ぎさる。この際従来廣く行はれてゐる振りつけ洗は、布の表面にだけ作用して組織内部にはよく及ばないから品物の大きさに應じそれぞれ掴み洗・押付洗もしくは踏み洗の操作を加味するのが能率的である。而して數回水を替へて行ふ。石鹼を用ひて洗濯した場合にはただちに冷水で濯ぐと石鹼分が布地に附着残留し、その布味・色澤等を損する虞れがある。用水が硬水の場合には殊にこの缺點が著しいから注意すべきである。

## 2. 脱水

洗濯した物は、乾燥を容易ならしめるため脱水する。襦袢・シャツ・浴衣等のまる洗したものは、なるべくすべての縫目が縦の方向になるやうに纏めこれを振つて搾るのもよいが、絹物・毛織物・人絹織物・スフ織物等は種々の不結果を生じ易いから、平板の上に盛り上げ、両手で押しつけて水を切るやうにするがよい。多人數の家庭や寄宿舎などでは遠心力を應用した小形の手廻脱水機を應用すれば品物を傷める虞れがなく、し

かも能率的である。

### 3. 乾、燥

脱水した洗濯物は皺を伸ばし形態を整へ、褪色の虞れあるもの以外は一般に日向に出して乾かす。毛糸や人絹の絹物のやうに濡れると伸びて形態を損するやうな品物は、なるべく張方のかからぬやうに注意せねばならない。

絹物・襪物等で乾く間に色のにじみ出る虞れあるものはなるべく手早く干し上げるやうに工夫する。絹物やモスリンの場合には、最後の濯ぎ水に極く少量の醋酸を加へるがよい。

⑧ すべて染色物は乾燥状態に於けるよりも湿潤状態に於いて直射日光に曝露された場合に褪色する傾向が大である。故に日光に對する堅牢度の低い染色物の場合には、日陰の風通しのよいところで乾かすがよい。

⑨ 乾く間に色がにじみ出て困るやうな染色は大體直接染料又は酸性染料を應用した場合に多い。これらの染料は動物性纖維に對し、微量の酸があると親和力を増すから、この作用を應用すると色のにじみ出のを防ぐことが出来る。鹽基性染料で染めた絹物やモスリンを醋酸水に浸すと却つて色のにじみ出る傾向を増すから、醋酸水に浸して乾かすことが、いつでも色の溶出を防ぐ効があると解してはならぬ。

## 第四章 洗濯後の仕上

### 第一節 仕上の一般

#### 1. 洗濯後の仕上

洗濯した物には、その用途に適應する形態と布味とを與へるため仕上を行ふ。

仕上は纖維の可塑性を應用するか、更にその上に糊付による布味の改善を應用して行ふ場合が多い。

#### 2. 糊付

糊付は織物に特殊の布味を與へ、表面のけばを伏せもしくは一定の形を長く保持せしめることを主目的とするものである。

糊付には水濯ぎ後脱水したものに施す場合と、一旦乾かしてから行ふ場合とがある。解き洗した場合には、仕事の都合上後者によるを普通とし、まる洗した場合には、前者による方が干し上げの手数を一回省く點で能率的である。

仕上用の糊料には種々あるが、一般に白物には生糊・澱糊のやうな澱粉類を、色物にはふのりもしくは前記

⑩ 乳着系縮類・毛織物等には糊付しないのが普通である。

のやうな澱粉等を用ひるのが便である。澱粉類は水を加へ80乃至90に15乃至20分間加熱して糊化させ、ふのりは數時間微温湯に浸して膨潤せしめた後軽く煮て糊としこれを濃して用ひる。糊液は濃い目に作つて置き、これを適宜に薄めて用ひると便利である。その適應濃度は糊付すべき織物の種類用途或は各自の好みなどによつて異なるが澱粉類は水 $\frac{11}{5.5}$ に對し $\frac{15g}{4}$ ふのりは $\frac{4}{1}$ 乃至 $\frac{6g}{1.6}$ の見當に含むものを大體の標準とするがよい。糊の効き目は糊料の種類濃度に關する外、糊付する布帛の含水量及び糊付後の搾り方によつて著しく左右される。糊液の所要量は大體一反分に對し $\frac{1}{5.5}$ 乃至 $\frac{1.21}{6.6}$ と見てよい。

### 3. 仕上法の種別

諸種仕上法中普通に行はれてゐるものは、敷伸・板張・伸子張・湯伸・アイロン仕上等である。これらの仕上法は織物の種類用途によつてそれぞれ適否があるから、そのいづれによるべきかをよく考へねばならない。

## 第二節 諸種の仕上

### 1. 敷伸仕上

生乾きのときに取入れ、もし十分乾いてゐたならば霧を吹いて全體に少し濕りを與へ、布の幅丈を適度に引伸ばし、形を整へて熨みつけ、再び擲げて干し上げるのである。この場合疊んだものを莫座の間に入れて、踏みつけると一層効果がある。

### 2. 板張仕上

解き洗した場合に糊液を用ひ、布片を平滑な板面に皺を伸ばし形態を整へながら貼り付け、そのまま乾かして仕上げるのである。これは木綿物絹物又はそれらの交織物等に適用される。

張り方には(1)布の表を内側に疊むやうにして糊液に入れ、糊液を十分浸み込ませ、張板の上に出し、掌で押し、平均に搾り、張板に貼付する仕方、(2)張板に糊液を刷毛で引き、布の裏を板面に擲げて貼付する仕方、(3)布の裏を上に向けて板の上に擲げ、これに糊液を刷毛で引きつけ、布をかへして張板に貼付する仕方がある。

③ 以上の貼付法中、(2)及び(3)では糊液は主として布の裏面につき、表には自然ににじみ出た糊液が刷毛で掻きでるうちに平均に分布されるだけであるから、布の表の光澤がよく仕上がる。またこの方法によると染色の餘

いづれにしても布目の曲らぬやう、布幅が一樣であるやうに張りつけるのであつて、布が板に落ちついたところで空刷毛でなでて糊の分布を均等にすると同時に少しの小皺もないやうにすることが肝要である。

張板の兩面に張り終つたら、日當りのよい適當な場所に立てかけて乾かす。しかし日光に褻め易いものは風通しのよい日蔭で乾かすのがよい。兩面が乾いたら注意して剝がす。

板に接した面はとかく悪光りがしたり、乾いてから布を剝がす際にけは立つたりする缺點を伴ひがらで、眞の布味は板につかない面にあるから、表にする方を上にして貼る。

### 3. 伸子張仕上

元の反物の形に縫合はせた布の兩端に同じ幅で長さ  $\frac{12\text{cm}}{3\text{寸}}$  程の丈夫な布を縫ひつけ、先づ洗濯を終へ、兩端に張手をつけ縫代のある方を上に向け端縫の際と緯の縫目にだけ下側から一乃至二本づつ伸子を打ち縫目の皺を伸ばし乾かす。この場合の伸子を飛伸子といふ。次に縫代のある面に糊液を刷毛引し、その反対

り丈夫でない布を張る場合にも、糊液に布を浸してやる仕方に比べると、染色の落ちることが少なく、糊液を汚染することも殆どない。

面を上にし、同じ刷毛で糊液をつけずに擦つて糊付けを平均にし、縫代のある面を上に向け直し適宜の間隔を置いて兩耳に伸子を打つて乾かす仕上法である。乾いたら兩耳に沿つて  $\frac{4}{1}$  乃至  $\frac{5\text{cm}}{13\text{寸}}$  の幅になるべく中央の方にばかし氣味に水刷毛で軽く水を引き、飛伸子だけを残して他の伸子を取り、兩手の拇指と食指で兩耳を経の方向にしごいて伸子跡を消し、張手をつめ経の方向にやや強く張つて乾かす。乾けば飛伸子を取り、一方の張手を除いて適宜にたくり疊み、他方の張手を除き二回はたいて布味を柔め、縫目を解き、縫合はせの折目と兩耳とに裏から軽くアエロンをかけて伸ばし、表裏を取違へぬやう重ねて疊み、或は卷棒に巻いておく。

用ひた伸子は弓形に曲つてゐるから、揃へて逆に曲げ眞直にしておく。

伸子張仕上は縮緬縮類毛織物、スフ織物以外の地の平らな織物特に絹織物の仕上に適し、張上後の光澤や布味は一般に板張仕上に優る。

### 4. 湯伸仕上

乾いた布地に熱い蒸氣を當てて纖維の可塑性を發揮させ、適度に伸ばし形態を整へる仕上法である。これは専ら縮緬錦紗明石等の仕上に應用される。

布が長い場合は両端を縫合はせて輪の形とし、布の裏面を外側にしてその間に丸棒を二本入れ、これを二人が向かひあつて持ち、反対の方向に引張りながら湯伸釜から盛に出る蒸氣に觸れさせ、所望の程度に布幅を出しながら、順次布を循環させる。絹物類の仕上や、絹物に用ひた古い毛絲のくせを直す場合にも湯伸仕上を適用する。

#### 5. アイロン仕上

一般に繊維は乾いた状態にあるときよりも湿つた状態にあるときの方が可塑性を發揮し、更に湿つた状態のものに熱を加へるときは一層それが著しい。アイロン仕上は湯伸仕上と同様にこの事實を應用した仕上法で、布に適度の水分を與へ、これに適度に熱したアイロンを當てて布全體の皺を伸ばしたり、或は布に所要の折目をつけ形態を整へるものである。

仕上を行ふべき布に適度の水分を與へて仕上げ臺の上に擴げ、次の點に注意してアイロンをかける。

(1) アイロンの熱度はなるべく同じ種類の繊維から成る布片に當ててその強さを調べ、その他アイロン仕上の効果を左右する既述の重要な因子について留意する。

(2) アイロンをかけると、布の表面が滑澤になる。

これは特別の場合の外避くべきものであるから、一般には布の裏面にアイロンをかける。洋服その他裏面よりかけにくいものには、湿を與へてから水分のない綿布の類をあて、その上から間接にかけるか或は湿布を當てて、アイロンをかける。

(3) 布に縫目があれば縫目に沿つてかけ始め、全面に及すべく、折目その他布が二種になつてゐるところは、一重のところよりも十分にアイロンをかける必要がある。

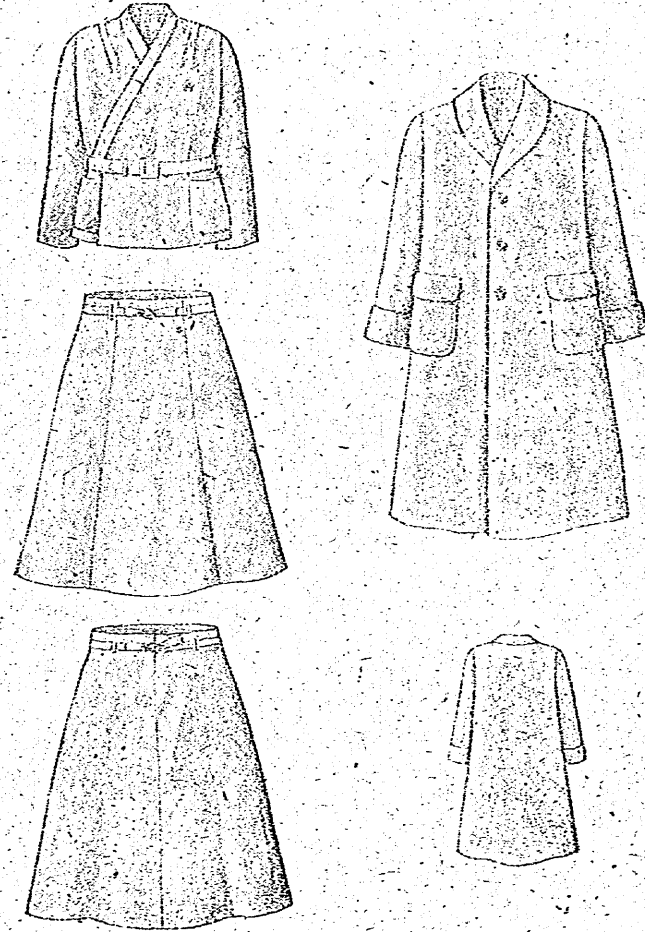
## 第五章 婦人服

婦人用平常着は一部式二部式いづれでもよいが簡素のうちにもおのづからなる氣品をそなへたものが望ましい。

次に示す形式は上衣と下衣とに分れた二部式で生活活動には都合がよい。上衣は肩に二本の縫ひつまみをなし衿は幅のせまい着物衿で袖は筒袖式の長袖とし帯を附ける。下衣は六枚接ぎ又は四枚接ぎとなし襷なしで裾開きとする。

着用法は下衣を先に穿き上衣は上につけて帯を締める。

次にその製作に就いて記してみよう。



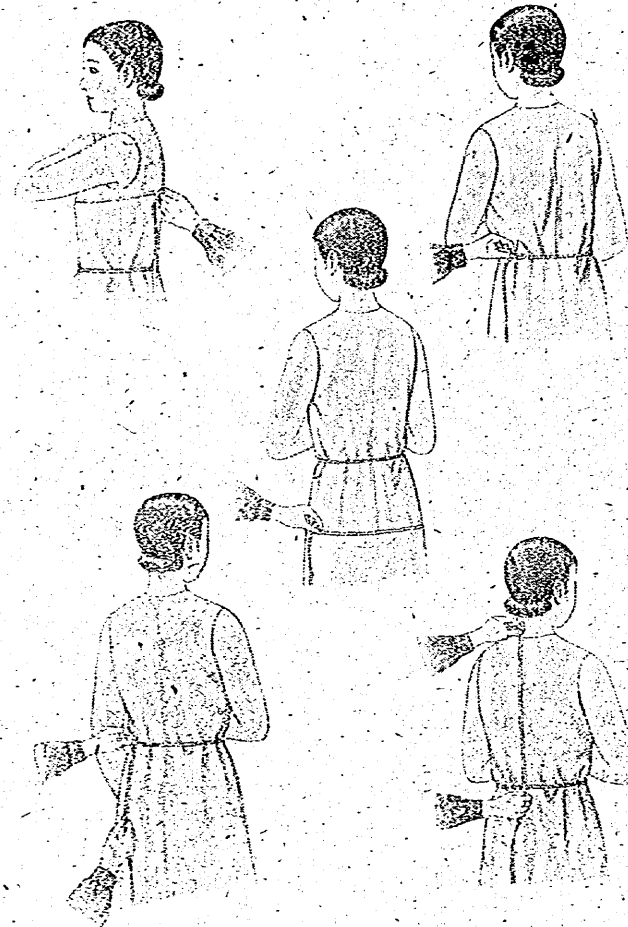
## 第一節 製作法

## 1. 寸法のはかり方

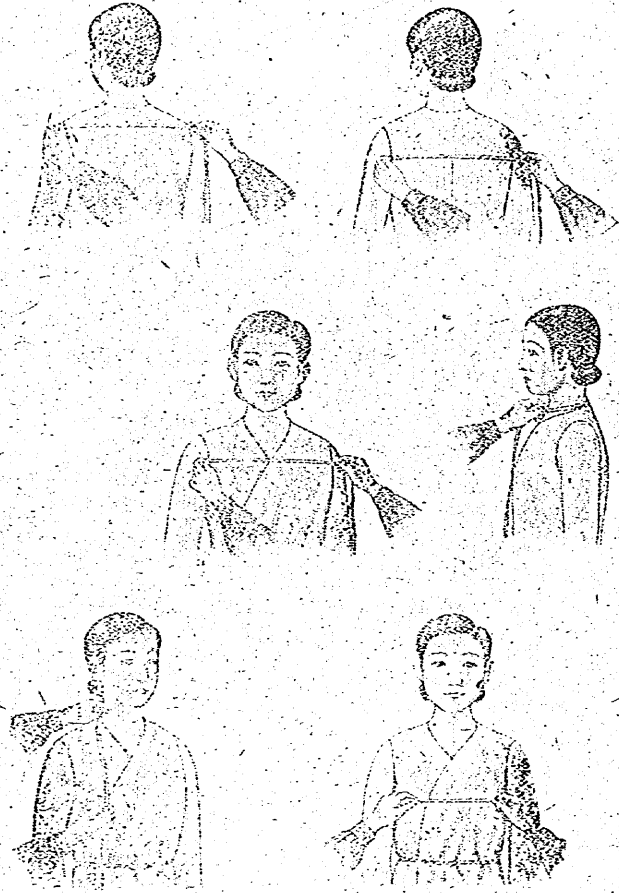
體形は人によつてそれぞれ異なるものであるから、その入に適合した服をつくるには、その體形を基準とする必要がある。寸法をはかるには、整つた下着をつけ普通の姿勢をとつたところに、正しく紐尺を使ふ。胸廻りに細紐を巻いておくとはかり易い。なほ探寸については、正確を期するとともに禮儀の上からもはかる際の體の位置、速度等につき注意することが大切である。

體形の實測箇所並びにその測定方法は被服の種類或は測定の目的によつて一定しないが、一般には身體各部を長さ幅その他の方向にはかつて示す。而してこれらの基準となるものは身長胸廻りで、これと身體各部位との比率は、體型研究體位測定上からばかりでなく裁斷寸法の割出しにも利用されてゐる。

被服が着用者の體に適合し、且つその生活活動に適應するものでなければならぬことはいふまでもない。而して乳下りは圍のやうに脊からはかつた長さから後衿ぐりを引いたものである。前丈は乳下りをはかる紐尺を更に乳の下邊りの胸廻り線まで伸ばしてはかつたもので、後衿ぐりを引くことは同様である。







かかる機能的性能を具備する被服をつくるためには、まずその體形を基準として、その體形の取り得る姿態、動作や成長による變化等について研究を加へ、これらに適應した被服の形態、意匠、材質の選定をなすことが望ましい。

## 2. 原型

### (1) 胸

前中心を左、後中心を右にして前後の半身をかく。

ゆるみは  $\frac{6cm}{1+6分}$  位即ち全體では  $\frac{12cm}{3+2分}$  位とする。袖ぐりの深さは頸廻り線より下に  $\frac{胸廻り}{4}$  をはかり、これを大體の標準とする。脇の線は前後の中央、或は  $\frac{1.5cm}{4分}$  位後に寄せてもよい。

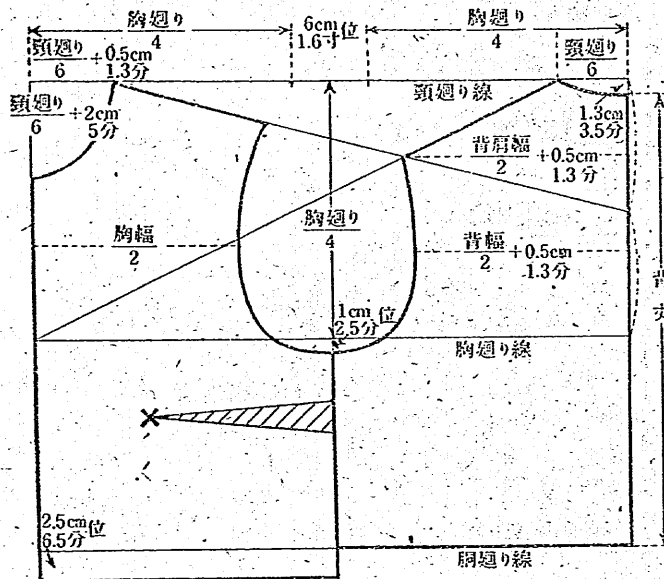
後

後衿ぐりは頸廻り線上に於いて横に  $\frac{頸廻り}{6}$ 、縦に  $\frac{1.3cm}{3.5分}$  位くる。この衿ぐり線より背丈をはかり、後の胸廻り線をつくる。

圖のやうに後肩下り線上に、後中央より  $\frac{背肩幅}{2} + \frac{0.5cm}{1.3分}$  をとる。袖ぐりのほぼ中央邊りで  $\frac{背幅}{2} + \frac{0.5cm}{1.3分}$  をとり、圖のやうに袖ぐり線をかく。

前

前衿ぐりは横に  $\frac{頸廻り}{6} + \frac{0.5cm}{1.3分}$  乃至  $\frac{1cm}{2.5分}$  縦に  $\frac{頸廻り}{6} + \frac{2cm}{5分}$  をとつてくる。



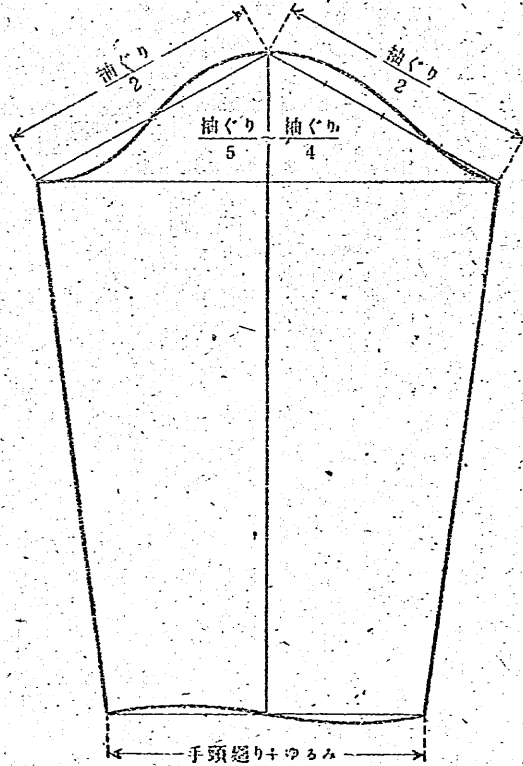
前肩幅は前肩下り線上に、後肩幅  $- \frac{0.5cm}{1.3分}$  乃至  $\frac{1cm}{2.5分}$  をとる。胸幅をはかつた位置、即ち前衿ぐりの中心より  $\frac{5cm}{1+3分}$  位下つた邊りで  $\frac{胸幅}{2}$  をとり、後よりやや深目の袖ぐり線をかく。

前下りは  $\frac{2.5cm}{6.5分}$  位にして、前の胸廻り線をつくる。また前丈をはかつて前下りを定めてもよい。この前下りは胸のふくらみの分であるから、脇で長い分は乳邊りの位置でつまむ。これを利用して服の意匠に應

じクセをつくる。なほ乳の位置を標しておく。

袖ぐりは腕附根廻りの寸法に約二割のゆるみを加へたものとなるやう訂正する。

(2) 袖



中央線上に袖丈及び袖山の高さをとる。袖山の高さは、 $\frac{\text{袖ぐり}}{5}$  乃至  $\frac{\text{袖ぐり}}{4}$  を大體の標準とする。

袖山の中央より  $\frac{\text{袖ぐり}}{2}$  をとり、圖のやうに袖ぐり線をかく。

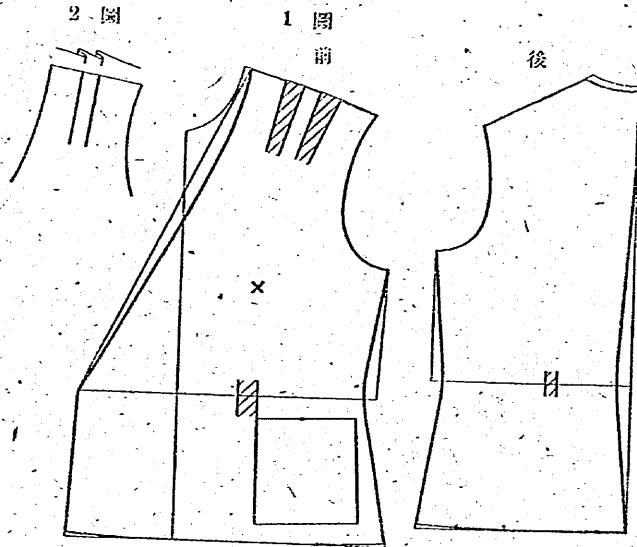
袖口は手頭廻りにゆるみ ( $\frac{10\text{cm位}}{2+6\text{分}}$ ) を加へて圖のやうにくる。

参考寸法

	大	中	小
身長	160cm 4尺2寸2分	153cm 4尺4分	145cm 3尺8寸3分
胸廻り	86cm 2尺2寸7分	82cm 2尺1寸6分	76cm 2尺
胸下り	74cm 1尺9寸5分	70cm 1尺8寸5分	65cm 1尺7寸2分
腰廻り	95cm 2尺5寸3分	92cm 2尺4寸3分	86cm 2尺2寸7分
腰丈	20cm 5寸3分	19cm 5寸	18cm 4寸7分
背丈	33cm 1尺	35cm 9寸5分	35cm 9寸2分
背肩幅	36cm 9寸5分	35cm 9寸2分	34cm 9寸
背幅	34cm 9寸	33cm 8寸7分	32cm 8寸4分
胸幅	31cm 9寸	33cm 8寸7分	32cm 8寸4分
頭廻り	37cm 9寸8分	35cm 9寸2分	34cm 9寸
前丈	42cm 1尺1寸1分	40cm 1尺5分	38.5cm 1尺2分
乳下り	27cm 7寸1分	26cm 6寸9分	25cm 6寸6分
乳距離	19cm 5寸	18cm 4寸7分	17cm 4寸5分
袖丈	56cm 1尺4寸8分	53cm 1尺4寸	51cm 1尺3寸5分
手頭廻り	17cm 4寸3分	15cm 4寸	14cm 3寸7分
腕附根廻り	33cm 1尺	30cm 9寸5分	35cm 9寸2分
後丈	102cm 2尺6寸9分	97cm 2尺5寸6分	91cm 2尺4寸

3. 型紙の取り方

(1) 上衣



後身頃

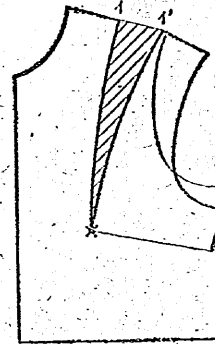
まづ上衣の丈を定める。上衣丈は實際の長さをはかるか、又は肩廻り線から  $\frac{18cm}{4}$  分位を伸ばす。

後中央線は肩廻り線に於いて  $\frac{2cm}{5}$  分位くり入れる。

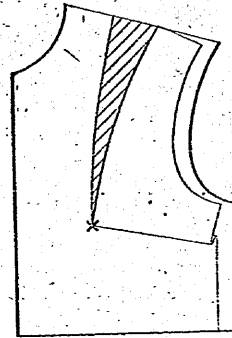
脇線は肩廻り線に於いて  $\frac{1.5cm}{4}$  分位くり入れる。裾は  $\frac{肩廻り}{4}$  に  $\frac{2cm}{5}$  分位のゆるみを加へる。

衿ぐりは原型より  $\frac{1cm}{2.5}$  分位大きくする。

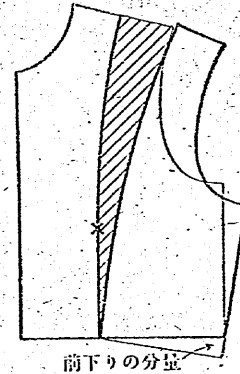
3 図



4 図



5 図



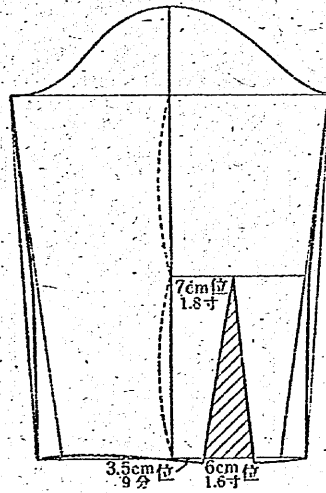
前身頃

3 図のやうに肩に切込みを入れ、脇で前下りの分をつまむ。

イイが肩のクセの分、これを2圖のやうに二本のつまみとする。この分量を多くしたいときは、4圖のやうに更に横に加へるか或は5圖のやうに開く。

1圖のやうに胸廻り線から後と等しく丈を伸ばし、脇の線も後と同様にしてつくる。胸廻り線に於いて  $\frac{\text{胸廻り}}{2}$  に  $\frac{4\text{cm}}{1\text{寸}}$  位のゆるみをおき、更に餘分があれば圖のやうにつまむ。

前中心より重なり  $\frac{22}{5.3}$  乃至  $\frac{26\text{cm}}{6.9\text{寸}}$  の  $\frac{1}{2}$  を出し、圖のやうに衿附線を定める。



るやうにする。

中央で袖幅が広いときは、圖のやうに適當にくる。

衿下線は裾に於いて  $\frac{1\text{cm}}{2.5\text{分}}$  位擴げ、次に裾の線をかく。

袖

袖口は原型よりつまみ分  $\frac{6\text{cm}}{1.6\text{分}}$  位を廣くし、これを圖のやうにとり袖口線をつくる。この縦の縫ひつまみ線は、手を自然に下げたとき肘から小指に向かつて流れ

(2) 下衣

接ぎ合はす布はいづれも同形となし、圖のやうに中央から二つ折

にした簡易な方法を用ひる。

下衣丈は後丈から床  $\frac{30}{8}$  cm 位を引く。

下衣の胸廻りの寸法は、下着その他により差異を生ずる

ことを考へてこれを定める。

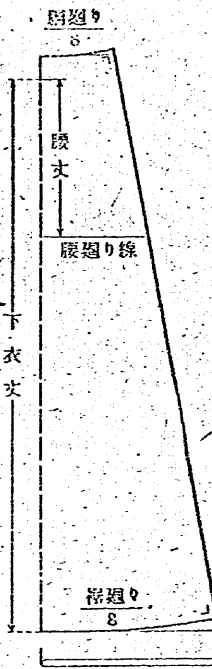
而してこの胸廻りのゆるい分は紐でかくしめる。この

のために下衣

六布の下衣



四布の下衣



丈を上部で  $\frac{2}{5}$  乃至  $\frac{3\text{cm}}{8\text{分}}$  位長くしておく。腰廻り線に於いてゆるみをしらべ、不足の場合は脇で出すやうにする。

#### 4. 布の整理

織物は近時繊維工業の發達に伴ひ、仕上の工程が各方面から工夫され、美しい布味を出してゐる。かかる材料に對して再び手を加へることは、不經濟であるばかりでなく、折角の布味をも損することになる。しかし、時勢に伴ふ繊維製品に適應した裁縫をなすには、常に研究的態度を以てこれが處理にあたることが大切である。

布を裁つ場合には、それに先立つて一應その伸縮度・染色度などをしらべ、しかる後裁縫及び着用後の手入れなどを考慮して、整理の要不要またはその方法を定むべきである。特に新製品に對しては、よく研究して使ひこなすことが望ましい。消費者としての正しい批判要求は、よりよい製品を生産せしめる上に大きな力となるものである。

#### 5. 布の裁ち方

總用布は布の幅、服の太いさ、裁ち合せの如何によつて相當の差を生ずるから十分計畫して購入する。而して布の經濟については、單に用尺の節約ばかりでなく、裁縫のことや着用後のことについても考察すべきである。

布の整理

は近時繊維工業の發達に伴ひの仕上の工程がから工夫され美しい布味を出してゐる。かかに対して再び手を加へることは、不經濟であるでなく折角の布味をも損ずることになる。し勢に伴ふ繊維製品に適應した裁縫をなすに研究的態度を以てこれが處理にあたることがある。

裁つ場合には、それに先立つて一應その伸縮度などをしらべ、しかる後裁縫及び着用後の手入考慮して整理の要不要またはその方法を定むる。特に新製品に対してはよく研究して使ふことが望ましい。消費者としての正しい批評は、よりよい製品を生産せしめる上に大きな力ものである。

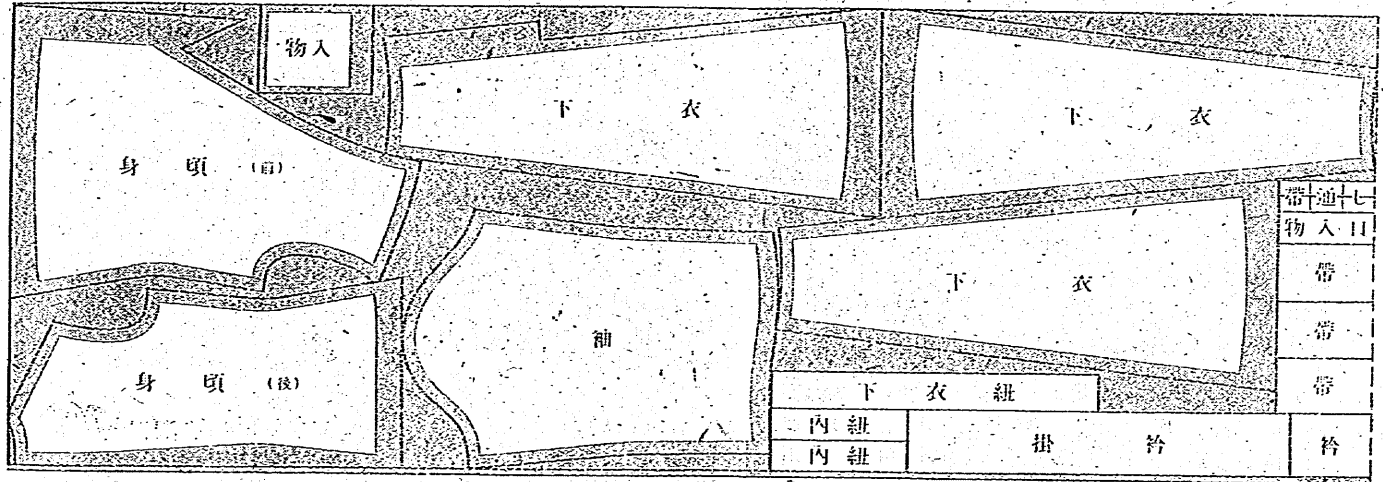
布の裁ち方

布は布の幅、服の太いさ、裁ち合せの如何によ常の差を生ずるから十分計畫して購入する。

布の經濟については、單に用尺の節約ばかりで縫のことや着用後のことについても考察する。

布の裁ち方

總用布 幅 73cm  
1尺9寸3分  
長さ 405cm  
1丈7寸



備考

身長 153cm  
4尺4分  
胸廻り 82cm  
2尺1寸6分

## (1) 型紙の置き方

布の経緯斜の性質及び感じを基準として考へ、布に傷のある場合にはこれを自立たぬところに廻す工夫が必要である。又残り布はなるべくまとめて出すやうに考へる。

## (2) 縫ひ代の附け方

型紙は全部出来上りの大きさであるから、適当な縫ひ代・折り代をつける。

## 上 衣

裾  $\frac{4\text{cm}}{1}$  寸位、袖口  $\frac{3\text{cm}}{8}$  分位とし、他は  $\frac{2\text{cm}}{5}$  分位とする。型紙の外に衿・掛衿・帯内紐・物入等を適当な縫ひ代を加へて裁つ。衿幅は出来上り  $\frac{3\text{cm}}{8}$  分位、帯幅は  $\frac{3.5\text{cm}}{9}$  分位とし、用布に餘裕のあるときはそれぞれ縫ひ代が心布となるやうに裁つとよい。

裏附の場合は表は夏服と同じでよい。裏身頃は前後裾・袖口は型紙通りにし、他は適宜縫ひ代をつける。

## 下 衣

裾  $\frac{5\text{cm}}{1\frac{1}{3}}$  分位、他は  $\frac{2\text{cm}}{5}$  分位、脇明はその始末に應じて適宜に縫ひ代を加へる。型紙の外には出来上り  $\frac{2\text{cm}}{5}$  分幅位の紐その他をとる。

## 6. 仕立方

假縫 一定の方法に基づく型紙の取り方では、各自



の採寸によつても各様の體形に少しの補正もなく合はせることはむづかしい。殊に簡易化した割合寸法を用ひるところには、實際に着用して合はせる必要がある。また布の使ひ方、布の味などにより型紙とは趣が異なるから、製圖で複雑に考へるよりも假縫による方が遙かに捷徑である場合が多い。

假縫は無條件に體形に布を合はせるのではなく、身體と布との間に適當な空間を與へながら、その人の體形に合ふ自然な美しい線を見出すとともに、生活活動に必要なゆとりを入れるものでなければならぬ。要するに假縫は、釣合ひのとれた着心地のよい服をつくるための重要な過程である。

#### (1) 假縫の仕方

前後中心には、必ず糸標をしてから出来上りの形に假縫ひ合はせをする。即ち上衣は前肩に二本の縫ひつまみをつくり、肩・脇を縫ひ合はせ、衿をつけ裾を出来上りに折上げておく。釣合ひはすべて本縫の場合と同様にする。例へば、肩は後の長い分をちぢめ、前をのばし加減にして合はせる。

袖は身頃の袖附線を検討してから、假縫するとよい。裏附のものは表布だけである。

下衣は各布を接ぎ合はせ、左脇上部を $\frac{20\text{cm}}{5+3\text{分}}$ 縫ひ残す。

裾は出来上りに折上げる。

#### (2) 體に合はせ方

假縫が出来たならば整つた下着の上に正しく着用し、次の諸點をしらべ、合はないところは補正する。この際下衣胸部のゆるい分は紐で軽くしめ、これを正しく落つける。假縫は、ただ静止の状態に合はせるばかりでなく、適當な動作をしてそれに適合させるやうにせねばならぬ。又縫ひ代のために判断を誤ることのないやう注意すべきである。

#### 上 衣

ゆるみ 運動を妨げないやうに胸廻り、肩廻り、腰廻りその他に適當に入れる。體に密着したものは、肥満型の人にも、瘦身型の人にもその姿態が明瞭になり過ぎてよくない。また發育途上にあるものは普通よりやや多い目に入れる。

縫ひ目の位置及び方向 オ. 肩合はせ 肩の線に従ふ。肩下りが身體に適合しない場合や前後の肩の釣合が適當でないときは、臍い線が出易いものであるから注意を要する。ロ. 縫ひつまみ 肩の二本の縫ひつまみは袖附と衿ぐりとのほぼ中間になるやう、長さは $\frac{9\text{cm}}{2+4\text{分}}$ 位とする。身頃前後の胸のつまみは體形によりおちつきのよい位置深さにする。ハ. 脇縫 體

の厚みの中央を真直に下に流れるのがよい。

袖及び袖附 イ. 袖附 袖附の位置と附け方とは服全體のしまりと腕の運動とに非常に影響するものである。即ち身頃袖のくり、袖のすわり、袖山の高さ並びに袖附の際のゆるみの入れ方などが相關聯して袖附を構成するものであるから、十分の研究と検討が必要である。ロ. 袖 袖丈、袖幅、縦の縫ひつまみ線の位置などを調べる。

丈 上衣の丈は腰部を覆ふ程度とし、なほ帯の位置及び上衣、下衣の丈の釣合ひが着用者に適するや否やを見る。

物入 大きさ及び位置を見る。

下衣

ゆるみ 胴部、腰部に應じて適當であるか否かをしらべる。

縫の縫ひ合せの位置及び方向 脇の線やその他の接合せ線は、それぞれの位置に於いて正しく下に向かつて流れるやうにする。それには各布の布目、縫ひ合せの釣合ひ及び上部のくりの如何などが大いに影響するものである。

全體の形 波状襷の出方、裾幅、丈等をしらべる。腰の形により上部のくりを訂正する。裾幅は脚

の運動を妨げないやうに注意し、丈は保健體容を考慮して規格の精神に副ふやうにすべきである。なほ裾の線は床より前、遊後などすべて同寸法、即ち水平になるやうにする。これは單に假縫の際ばかりでなく、着用後も注意せねばならない。殊に裁合はせの具合で縫ひ合せ目の布の斜の度が高い場合には、着用中これが甚だしく伸びて影響するところが多い。

本縫

上衣(浴仕立)

(1) 身頃

イ. 表の前肩の縫ひつまみ

ロ. 物入附

ハ. 表の背縫、脇縫 ともに縫ひ代は割る。

ニ. 表裾の始末 裾を折返して千鳥掛にしておく。

ホ. 裏の前肩の縫ひつまみ

ヘ. 裏の背縫、脇縫 背縫は  $\frac{0.3cm}{0.3分}$  のきせをみて奥を縫ふ。脇縫は割る。

ト. 表裏の脇とち

チ. 衿下の始末 裏の幅を少しひかえて表裏の衿下を縫ふ。表の衿下縫ひ代の多い場

K 450.5-2a

Approved by Ministry of Education  
(Date Sept. 25, 1946)

昭和二十一年九月廿五日 印刷  
昭和二十一年九月三十日 發行  
昭和二十一年十一月十一日 印刷  
昭和二十一年十一月十一日 發行  
(昭和二十一年十一月一日 文部省検査済)

師範被服 一冊用

定價 金壹圓七拾錢

著作権所有 著者 文 部 省

東京都神田區錦町一丁目十六番地  
印刷發行者 師範學校教科書株式會社  
代表者 森 下 松 衛

東京都京橋區入舟町一丁目十一番地  
印刷者 暁 新 堂  
代表者 新 井 修 平

東京都神田區錦町一丁目十六番地  
發行所 師範學校教科書株式會社

58. 8. 31 文部省登録入乙